

櫻貝

泉鏡花

作

一

「お目覺でございますか、もし、誰方ぞお目覺で
ございますか、願ひます。」

可哀に絶るやうな聲を、冴えた月影に硝子へ浸通
らして、西洋窓の戸を、外から、ほと／＼、敲くと
はなく、寂しい夜半の風の觸る如く、サラ／＼と撫
でる音。

冬の月夜の白砂の、それが光るばかり澄み渡つた
海岸の、黒い枝に水銀を流した磯馴松の中で。――
其の形は松の一本に隠れて何者とも知れぬ。

海までは二三町、なだらかな波の一畝りする砂山
を前にして、千鳥ヶ岳とも言ひさうな。

此の窓は、一軒建の平家の奥で、海に向つて座敷
二室を西洋造。表は格子戸の構へで離亭に出來た、

母屋おもやから十四五間けんおなじ小松原こまつばらを砂道すなみちで、緩くゆる中窪なかくぼみに隔へたつて、ふはりとハンモックに乗のつた風の、居ゐ心地こちは可よさうなが、便たよりのない貸別荘かしぶつそう。……母屋おもやといふのは、海濱かいひんの名なに聞きえたる旅館りょくわんなのである。

又また……聲こゑして、

「もし、お燈あかりが見みえまするで、お縫すがり申まをします。

お縫すがり。……叱しつ、叱しつ、叱しつ。

と陰氣いんきに沈しづんで、犬いぬか何なにか追おふらしく、

「お慈悲じひでござります、もし、願ねがひます。誰方どなたぞ

お目覺めざめではござりませんか、お燈あかりが見みえます。」

成程なるほど、窓帷カアテンを透すかして、瓦斯がすか、電燈でんとうが晃々くわうくわうとして見みえる。外ほかの硝子戸がらすどは波なみの動うごく毎ごとに、きら／＼と照てる中なかを、其その薄うすい樺色かばいろの窓掛まどかけを遮さへぎつたのは、萍うきくさを分わけた古池ふるいけの底そこに月つきが映さすかと思おもはれる、……四邊あたりの寂さびしさに陰々いんくとして、そして美つくしい。

こゝに住すむのは、唯女たゞをんなふたり二人である。

秋立あきたつてから保養ほやうに來きた。

ひとり 一人は色の浅黒い、垢抜けのした年増で、それは
つきそひ 附添の女中である。若い主人は、瘦ぎすな瓜核顔の
すらりとした、二十か一二と云ふ年紀・・・眞
つ 夏、海水浴の出盛る頃なら他に較べて尚ほ目に立た
う、秋寂びた濱邊には何に譬ふるものもない、たゞ、
さきのこ 咲残つた、あの常夏の、なつかしい薄紅の花一輪、
あはれに霜に悩むのが、ふと金色の旭を浴びて、露
よみか に甦へつた莖もなやかに、白雪の富士に化粧して、
おもかげ 倂を紺青の波に宿した風情がある。

あらひがみ 洗髪も見た、櫛巻も見た、束髪も見た、土地のも
その のは、其の鬘の姿も見た・・・それが、何よ
かくだん り格段に目に着いたので、荒くれた漁夫も優しく、
しつなみ 白浪の月に敷く渚に色が目立つとて、此をば渾名し
さくらがひ て櫻貝の奥さんと言ふ。・・・

とし 一度おなじ年ぐらゐの、婀娜なの、花やかなのが、
にん 四五人、車を連ねて訪ねて来て、二人はその日の夕
がた 方に、あとは翌日まで一夜泊りで、さんざめいて歸
こと つた事がある。

人品ひとがらな少わかい紳士しんしが、停車場ステーションから自動車じどうしゃで乗りつけ
て、晩ばんに来て、其その夜よの終しまひ汽車ぎしゃで歸かへつた事ことがあ
る。・・・・・二月ふたつきばかりの間に音信おとづれた客きやくは、其
の二組ふたぐみのみ。

旅館りよくわんにも客きやくの絶間たえま・・・・・夙勝こがらしがちに地曳ぢびきも遠退とほのき、
松露しやつろの名所めいしよと云いふでもなければ、松原まつばらに人も寄よらぬ。

蒼海原あをうなばらに花はな一輪りん、女中ぢよちゆうを根ねじめに、ものしづかに
日ひを暮くらす。

夕風ゆふなぎの渚なげんを、しと／＼と拔足ぬきあしで、五位鷺ごゐさぎのやうな
のが、彼方あなた、此方こなた、遠浅とほあさに寄よる魚うをの影かげを狙ねらつて、颯さう
と、眞黒まじくろな翼はばを投なげる、其その網あみに、きらりと星ほしのや
うな鱗うしんが貫ぬかれる。・・・・・くらゐな處ところ、村むらの小をが
川はに沙魚さごを釣つる數かずほど濱はまには晝ひるさへ人ひとが來こぬ。

冬ふゆは寂さびしい、又また靜しづかな海うみである。

・・・・・町まちも村むらも、今年ことしは別わけて平和へいわであつた。

然る處、停車場の傍にある小さな會堂の牧師が言はるゝ、聖書の書拔きらしい平和な地であつた處、つい近頃、此の霜月に成つてから、引續き、變な事をかしたな穩ならぬ事が、あれ／＼波が、波が、と云ふ形に重つて押寄せた。

岬に添つた差出の磯に、一朝、十八九の、うら少い、もの優しい娘の、がす絲に、唐縮緬づくめ、緋の下締のくけ紐も綿の見える果敢ない姿で、死骸に成つたのが、海の神もあはれがつたか、山の根の岩角は避けながら、海松の砂へ、解けた髪のスんなりと、引潮に残されたのがはじまりである。

鯨が寄つても驚かない、．．．小遣に困つた若いものは、（おいらん）と稱へて、荒波の河豚を狙ふ海邊の習、．．．今年こそはなかつたが、海水浴に二人や三人のそれなりけりは毎々のお定り。檀那寺の玄關番で濟ましたもので、其の娘の死骸は、式の如く取置申候で、事濟みと成つた。

が、續いて、……村を通る鐵道の踏切に轢死人が二人出た。いづれも東京から覺悟して來たのである。

唯、今度は土地のものが一人溢れて死んだ。然も此の旅館の、其は風呂番の親仁で、尤も七十三と云ふ……おめでたいのであるが、不思議なのは何の不足もない、自棄も張合も意地もない、結構人の飼殺しで、立派に死支度さへ出來て居たのが、場所もあらうに、此處からは凡そ磯づたひに二里餘、村數處々五つばかり隔てた、一寸した浦の賑かな町の、山の下を曲角の桶屋の背戸、表通りの垣根の中の立樹の枝に干してあつた串に刺した小さな鱧を段に編んで、繩に釣した、其のわなの中へ、白髮首を突込んで、なめくぢのやうな長い舌をだらりと往生。

何と！……其の珍事出來が一昨夕の夜中である。

桶屋では、若い女房が迷惑を一人で背負つた。宿場の足拔か、博徒の姐御かと云ふ、場所には似ない、

横櫛の媚かしい中年増であるから。

何か面あてにでも縊れたらしい。但し盆にも、十
三夜にも、其の女房は何處でも、口一つそんな親仁
に利いた覚えはないと云ふ。又それが事實らしい。
雖然、狭い土地の陰口は蔽はれぬ。何しろ少なから
ず迷惑した、いや、まだ迷惑最中であらう。

重ねて言ふ、それが一昨々日。

昨日の夕暮に又一事件はだかつた。

齊しく浦續きの別な村に、取つて十一に成る評判
の才子がある。十一歳で才子も變だけれども、神童
は些と仰々しい。．．．農家の悴で、でぶ／＼
と肥つた、口を大きくへの字形に結んでぢろ／＼頤
で大人を見る。．．．

矢張り海水浴場なる其の村の別荘に、夏うち東京
から来て居た、或侯爵家の小公子と蜻蛉釣から馴染
に成ると、殿、御臺、お二方に其の才能を認められ
て、小公子が休課中、讀書、算術、温習のお對手に

召出され、やがて、紅白の水引で、金子二千疋、袴羽織一揃を賜はつた。

と此だけの事ながら、村では星が化けたほどな評判。

當の悴も、づつと氣取つて、既に自動車があれば乗る處、お百姓の悲しさに、其處までは届かないので、牛を曳張出して、學校から歸ると毎日常出す。此が草籠をつけて笛を吹くのだと、不器色でも仔細はなかつたのであらう。けれども、横見臺の斜に構へて、掌に据ゑて讀書です。浦吹風にしめりをくれて、ベラ／＼とめぐりながら、時々、朗々と聲を張つて、浪打際を伸して歩行く。

黄昏であつた。ひゆうと鳴つて、風を切つて礫が飛ぶと、牛が、船を抱くやうにぬいと前脚で立つや否や、光を消した隕石の如く、白波の磯を駈出して、悴は鳥の如くバツタリ、と落ちた。

其その今こん夜やなのである。
――硝子窓がらすまどを敲たたくくのは、――

「もし、お燈が見えますが、……」
 窓は唯一つ、其處だけに燈が映す……
 に臨んで三個ばかりある。ほかのは皆、月に眩しさ
 うに輝くと見ると、小浪の引くはしに、すや／＼と
 暗く眠る。……其處が次の室であれば、年増
 の女中は、寢込んで居よう。そして、どんな夢を見
 るだらう。

「それとも、お休みでございませうか、もし、お休
 みでございましたらお目覺を願ひます。」
 さら／＼と又戸を撫でる。

奴の手は、腕を伸ばして、然うやつて窓を密と敲
 くらしい。が、あの野蠻人が、遁げて敵から隠れる
 時には、縦横に姿勢を造つて、立樹に紛れると云ふ
 のと齊しく、手の動くのが、硝子に映る磯馴松の枝
 に紛れて、波が靜に動かすのか、風が軽く揺るのか、
 見分けが付かない。

兎に角、黒い影である。月夜に墨の飛沫である。

「お慈悲を遣はされ、もし、お休みなら、お目覺を願ひまいます。あッ、」

けたゝましい聲を底深く響かせた。

「一命に關ります。」

唯、其の樺色の窓帷が、取る手もしなやからしく、すつと孔雀の尾か何ぞ窄られたやうに手繰られて、其處へ艶麗な顔が映つた。

枕を離れて、起直つたかと思ふ。やゝ寛いだ胸の白さに、下襲ねの襟が一筋、月が劃つて、薄蒼く藍と紺の、しつとりと膚に着いた絹縮みの小袖を上へ、伊達巻は支度氣なからう、乳のあたりが、室の中の暖かさを想はせる。ほんのりと霞んで映つて、襟は透通るほど白いのに、黒繻子の襟の懸つた、斧、琴を、菊ぢらしの、紫紺の寝ン寝子半纏。紅羽二重の裏を深く、優しい肩にちらりと掛けつゝ、年紀よりは長けて重みの見ゆる、薄手な圓鬘の、それも重たさうに恍惚とした目をやゝ仰向けに、前髪の影を艶

かに、温室の奥三尺の花、薫は硝子の戸に迷ふ。

其の窓を、頭の天頂で突くが如く、黒い、三角の蔭を衝と松の枝はづれに顯した魔ものを見よ。川尻から河童が上陸して水掻のある黒い手で、美しい魂を扱帯ぐるみ抜いて行く殺氣は籠るが、寝亂れつゝも品の好さに、婀娜な龍宮の寢室へ召されて、扉の外まで、奴隷の黒奴が伺候した風情である。

て、
彼奴土蜘蛛の蟠る如く、頭ぐるみ蠢々と手を合せ

「奥様！」

「誰？」

撓ふばかり胸を伏せて、綺麗な鼻筋で覗かうとす
るらしく、戸が上へ二三寸。

あゝ、櫻貝の奥さん、開けては不可ない。
いけないと云ふのに！

「何？」

と又愛の籠つた聲を掛けた。

「あゝ、奥様、お助けを願ひます。」

「何うかしたんですか。」

「一命に關りますので……」

「何？ 貴方は。」

「旅……旅のものとござります。困窮ものでござりまして、御、御覽の通り、見すばらしい風體をいたして居りますために、犬に、可恐い犬に取巻かれて居りますんで。えゝ、二三疋、大な牛ほどな、吠、吠えはいたしません、吠えはいたしません、が、其の、腹を土に摺着けて、尻尾を疊んで、あれ、あれ、角のやうな耳を、ぴく／＼と動かし、ます。……揃ひも揃つて、猛犬、猛犬。……わあゝ！ 一息でも抜ますと、突然、あれ、嘔倒しさうに、脊筋を畝らす。」

「西洋館の番犬でせう。」

「えゝ、それ西洋館の柵を超えて、高い處を飛出しました。……身體が窺んで、動、動けませ

ん
の
で。
「

四

何の疑ふ様子もなかつた。

「早くお入んなさいまし、表へ廻つて頂戴。戸を開けますから。」

姿を横に摺らして、すらりと立つ時、伊達巻の色が見えた。腰へ、辻つて、襷は深いが、する／＼と引く裳の音、立つと凜とした圓髻の品が備はる。

「あゝ、滅相な。じり／＼と後退りに、三方から網なりに絞られて、お窓の前へ押詰められましたのでござります。明の力は、獣に大砲で、うっかり飛着きはいたしません、一寸でも動きますと、一しに噛まれます、……絶體、絶命、お慈悲に、此の窓をお開けなすつて、へい、お情でござります。」

「でも、こんな處から入れるの、」と、もう無造作に、寝ン寝子の片手を掛けた。

あゝ、悪い。・・・櫻貝の奥さん、眞個の事をお知らせしませう。

冬が来て、山の膚にも、犬の背筋にも、峻が立つと、火の用心がはじまつて、此の土地一廓づゝ夜番が廻る。

東京の月番、長屋なみで、一軒一軒、時を極めて交代に、夜通し一人づゝ拍子木カチノゝで川縁、山の据、町屋、百姓屋の裏表を廻るのである。が、小百姓の悴で、晝は、うる抜きの大根、蕪、勘平の細い腕などを賣つて歩行くのが、軒割の入費、出合錢をしこための小遣取りに、一人で請負ひをして、宵の内は寝込んで、買食の、ぷっかけ、天麩羅、汁粉、焼芋で腹を拵へ、其の勢で夜通しの火の番。

から元氣の悪たれ小僧と若い衆の、丁ど合の子の生意氣盛。

「べらぼうめ！」などゝ、出張つた榎の根ツ子、路に落ちた棒切れを蹴飛ばして、カチ・カチ・カチ・カチ

手と廻る。

時々流行唄の拍子に成つて、

寒い風だよ、ちよぼ一風だよ、

四割五割と吹いて来る。

「畜生めい。」

で威勢は可いが、

「堪んねえや、おゝ、寒い。」

鼻をすゝるので、本性を顯す。やけの半纏、頬被り。何が火の用心やら、傍目觸らず、對手が活きたものでさへないと、可恐しく強がつて、破れかけた垣根の如きは突破つて畦道に抜けるのが。――今夜は餘りの明さに、晝と夜を取違へて、霜に酔つたやうになり、娑婆氣な案山子が月に化かされて歩行出した形で、……つい、今しがたの事である。

街道傳ひの片側道、前を川にして、其處に假橋で客を通す、此の旅館の川向う、橋の袂へ、件の中小

僧、ふら／＼としてカチ／＼齒の鳴る胴震ひ、拍子木は附けたり、腕は枝になつたと鯉口へ引込めながら、來掛つて、

「此處の饅頭のふかしたてア、堪らねえ。」
と取着きの甘酒屋が寢靜まつた穴だらけの板戸を睨んで、其處から芬と香氣でも湧きさうに、身悶えをして、一つ腰を伸すと、井の端錢、うなりを立て、チヤラリと鳴る時、晃々たる天心の月から黒雲の舞下つたやうに、ぬつと目の前へ立はだかると、ものをも言はず、突然、ぐいと取つて、火の番の中僧の咽喉を締め上げた、頭三角の黒頭巾、筒袖の古外套を半分丈で、素足に草履履の怪體がある。

「うゝむ。」
あはれや、腹掛もせぬ胸を露顯に、のけ反る中僧を、じろ／＼と上から視めて、

「何だ、手前は。」と少し緩める。
「火、火の番よ、小父さんは。」
漸と呼吸が出る。

「俺か、強盗だ。」

「わあ。」

「靜にしる・・・生意氣に、手前六尺だ

な。――解け。」

中僧に禪を解かせて、

「坐れ。」

と橋の欄干へ後手のぐる／＼巻。

「奴。」

「小父さん。」と、目をばちくる。

「土地で一番と云ふ別嬪は何處に居る。・・・

嘘を吐くと、尻から裂くぞ。」

「櫻、櫻貝の奥さん。」と――其處で、居

所、道まで饒舌つた。

奴は、落した拍子木を拾つて、繋ぎの紐を、ぐな

りと成つた中僧の頸に掛けて、

「黙つてる。・・・俺は無線電信と云ふんだ。」

形かたちは見えねえでも、手前てまえが聲こゑを立てると、飛道とびだう具ぐで
ピシリだぜ。」

中僧ちゆうそうに、がく／＼と額うなづかせて、三角かくの中なかでニヤリ
として、橋はしを渡わたつて來たのである。

火ひの番ばんは月下げつかに一人ひとり、假橋かりはしの霜しもに凍こてた。あらう
事ことか！ 犬いぬは此この方ほうを取卷とりまいたのである。．．．．
尤もつとも顔かほ馴染なじみで、吠ほえもしないで。――

五

外では、足をむずつかせて、

「え、飛込めます段か、奥様、一生懸命でござりまするが。」

何の、まあ、一生懸命なものか。白い手が窓帷にちらりと動いて、戸はまだ二尺開かないのに、大なる守宮の如く、翻然と跳ねて、ぴたりと外壁に足を宙に附着いたと思ふと、肩を一揺り、衝と頭から入りしなに、窓際にあつた机を見て、踏まず・・・易々と飛越す早業。

こゝに較べては恐多いが、傳へ聞く義家卿は、恠うした時に、飛びながら御佩刀を抜打ちに、敵が企んだ障礙物の碁盤を切つた。

奴は躓きもせず、發奮みもせず、すたと軽く疊に着いた、が、餘りの身軽さに、其のまゝ窓際に、はつと膝を支いて氣を取られた麗やかなる夫人には見返りもしないで、其の足で、隣の間襖をスツト

開ける。

唯、其處には、うしろ向きに銀杏返を見せ、室の暖さに、夜具を乗出し、寝衣の肩さへ居汚く、年増の女中がぐつすり寝て居る。

ぞつと見透し、

「内にや、此切だな、可し、次の間の新造は熟く寐て居る。……最うひけ過ぎだ。」

とニヤリとすると、密と閉めた。襖の合せ目を背で壓へて、くるりと向直ると、兩方立膝に腕組みしながら、少し反身に凭れかゝつて、頭巾の中から、雙つギロリと光を射た。

夫人の衣紋、帯のゆるやかだつたのも道理こそ、向つた床わきの壁に寄せて据置いた瓦斯暖爐、鮮けき紅の炎を嚙んで、百日紅に夕日が燃ゆる。

……ト汗ばんだらしい夫人の膚に、颯と霜を結ぶ、伊達巻が冷くキウと鳴つた。

奴は徐に頭巾を刎ねた。が、何と、恰も、其の鼠色の裏に破れた汚点のあるやうな、鉛色の髭だらけな面を出して、

「華魁、華魁。」と云つて、其の黒ずんだ唇で

冷笑ふ。

夫人は身動きもしないで、凝と視た。

「大層、お澄ましたねえ。」

と腕を解くと、懷中を搜つて、凡そ出刃くらゐな、切味のづしりと重い大小刀を、黙つて疊へ。

殺氣の毒を引いて、暖爐が。パツと呼吸を伏せて、紫色に成る影に、夫人の頬は蒼白い。

「華魁……おい、堅く成つてら、突出しか、手のねえ女だ。可哀相に恐怖なからう。……おい、毒蛇の口へ玉子だぞ。斷念めねえ。……おい、何とか口を利きねえな。」

すると意外な。

「はい。」
と片膝を浮かしたが、座をもとへ、机の前の友染蒲團に直して、襦を引いてきりりと合す。下搔は緊つたが、寝ン寝子の肩は緩やかである。

机の上には、巻紙を繰りひろげて、そして折手本があつて、硯の墨に、まだ閉めぬ窓の影、電燈は上に明るいが、月はそれよりも冴えたのである。

手紙か何ぞかきものをして居た。居つゝ先刻に、窓を覗いた半身は、枕に着いて居たのではない。床は背後に、夜具の錦が、暖爐の影に宛然の牡丹の室、蝶になりさうな枕が浮いて、散斑の櫛の沈むを待つ。

今の返事と、其の様子に、奴は、焦れたやうに足を刻んだ。

「可厭に落着いてるぢやねえか、切わものでも持つてやしないか。尤も、そりや抵抗ひしたつて、石を穿く針だけれど・・・手出しをされるトタンに自分で死なうとか何とか云ふ・・・それぢ

や血ちを嘗なめる獸けだものだ。 俺おらあ、花はなを吸すふ蜜蜂みつばち
よ、恚かう見みえても。おい、刃物はものがありやしねえの
か。
「

「有ありますわ。」

と、其その卷紙まきがみと筆ふでの間あひだから、青貝柄あをがひえの華奢きやしやな、し
かし鋭すどい小刀ナイフを取とりつて、身みを蒼あをく抜ぬいたまゝ、疊たゝの
上うへを袖そでと一所いっしょにずつと摺すらして、

「さあ。」

と出だすと、彼奴きやつの小刀ないふにカチリと觸さはつた。

「お前さん。」
 夫人に、ふと呼掛けられて、二つ重る小刀を見て、
 うっかりした彼奴は、驚いたやうに顔を上げる。

「何だ。」

「お金子が欲しいんですか。」

「そればかりぢやねえ。」

「他に？」

「済みませんがね、奥さん、もう華魁なんて失禮
 な事は言はねえ、奥さん、貴女の身體が借りてえん
 だよ。へ、へ。」

と笑つたが、獐猛なものであつた。

摺り下る寢ン寢子を、ぞろりと上げて、
 「然う・・・そりや不可ません。」と氣の
 籠つた威のある顔を、凜と向う向きに、襟脚白く机
 に凭る。

奴は猛然と起つた。・・・少時猶豫つた後、

「先づ、屏風を立てよう、羨しがる奴があると不可ねえ。」

怪しき運命の襲ふが如く、夫人の黒髪の上に蔽はれ掛つて、硝子戸を落すと、窓帷を颯と引く。

「何をするんです。」

其の手が夫人の袖に掛つたのである。ト詰る間もなく、寝ン寝子は肩をこつた、――媚かしい軋むが如き音を立て、――それが聲には出さぬ、婦の悲鳴のやうに聞えた。あゝ、紅裏が翻る、・・・皮を剥ぐより無慙らしい。

「身體中、針の鱗だ。餘り、お氣の毒様だから、切めて膚觸りばかりでも、滑くして上げようと思ふんでね。」

と奴は、羅紗の上へ、其の引剥いた斧、琴を、菊の友染で。

「寝ねえ。」

「……」

「恚う成つちや仕方がない。寝ねえ。」

「私が寝るの。然うですか。」

しかしながら、見る間に、其の寝衣の藍縞ばかりに、身も姿も瘦せたのが、居直つて、片手を後ろ状に、腰を支いて、夜具の襟を取りつゝも、胸が撓に揺れる、と見る間に、すらりと隠れて、薄もみぢの厚衾、枕の蝶は櫛を支へた。夫人は面を背けもせず、寝ながら強盗を屹と視る。

奴は、じり／＼と襖際に退つて、じろ／＼と覗きながら、瞳を射返され氣味に、瞬きして、少時して苦笑した。

「串戯ぢやねえぜ、奥さん、夜具の中に短銃があるんだらう。」

「卑怯もの。」

と夫人は、するりと音を、――美しい血の膚に通ふ音を、厚衾の裡に立てゝ、くるりと背後向きに寝返つた。が、膝を支いて、彼奴が小刀に手を掛

ける途端に、夫人は衝と抜けて起直つた身動きに、
曳いた褌のかさねが亂れて、襲衣を切つた蹴出の紅。
暖爐の炎に照映えつゝ、ト蒲團に居直る隙もあらず。

蛇が腹を摺らして畝るが如く、一伸しに蜿轉り蒐つて、

「生意氣だ、婦。」
と横抱きに肩を掴むと、膝へ仰向けに夫人は倒れる。

「往生しろい。」
瘦せた大きな掌が、土蜘蛛の脚の如く、胸に節を立て、擴がつた時、夫人の襟はいよ／＼白く、おくれ毛の中に佛は澄んで、姿は、裳は、弱竹雪に折れむとす。世にたゞ呼吸あるものは暖爐である。

「罪滅しだ、えゝ、恚う。」

片手を、仰向けの其の襟に潜らしながら、月明に
大なる眞珠を抱ける如く、夫人の顔を膝に支へつゝ

も、重たさうに肩を落して、浮彫した白蠟の如き色
を、見る目を迂らしては、迂らしては慌しく見直す。

「随分罪を造つた顔だぜ。見ねえ、今時、玉章な
ぞ書きやがつて、何うせ、人殺しの文句だら
う。……密夫の許かな、畜生め、じやらして
翱れ。」

で、掌を、摺らして扱帯に掛けながら、机の上の
巻紙を、擦つたさうに、じろりと視る。

刈萱の穂の千鳥を、優しく月に散らした筆の運び
で。

—— かきおきの事 ——

(遺書の事。) と重ねて讀む。—— 面影の玉
に通つて水莖も薫る文字の、其の瞳に映るまで、仰
向けにされて瞬きもしないで従容としたのを、彼奴
は上下に見較いべたが、フト、其の夫人の手の、片
腕を眞直に、白い小刀の青い柄に置かれたのに心付

いて、
愕然^{がくぜん}として手^てを放^{はな}した。

「否、些とも世を果敢なんで、それで死ぬのぢやありません。」

櫻貝の夫人は端麗なり。――机の前。

「あゝ、急に寒く成つて來たい、御免なせえ。」
 彼奴は其の時、暖爐の前に踞つて、落窪んで險のある目のふちへ、今は却て酔つたやうな赤味ゝを帯びた、が、地獄の釜に火を焚いて居る袈婆氣な兄哥に似て居る。

這個藍面朱雲の鬼に對して、胸に、腕に守護符もなしに、肅然として夫人は語る。

「反對に未練澤山なんですよ。御覽なさい、藥罐のある事。――吸入器まで……毎日血を吐いて居るんだのに。」

あゝ、白金の針の尖の一滴も、身内の何處かに染

めては居ずや、膚は愈々白かつた。

「些とでも生きて居たいんです。ですから憚うやつて、主人にも、世間にも離れて、静に養生に來て居ます。それですがね、こゝに書いたのは、」
と巻紙を軽く壓へて、

「此處に書いたのは徒事ぢやありません・・・」

「

「呀、眞個に自殺るんで？・・・」

威しながら、劫しながら、先刻から潜めてた聲も、此の時間が一番低かつた。

「覺悟をして居るんですとも。」

「其奴あ・・・へい、遺書とあるのを見て、急に何だか手足が寒く成つて來た、私の心よりか、餘程何うも分らねえね。へい？」

「そりや私にも分らないの、でも何うしても死ぬつもりなんですよ。・・・何うしてツて、それはね、つい半月ばかり前だつた。」

不斷餘り出掛けないのが、其の朝に限つて、ふとね、海岸を歩行いて見たく成つて、また朝御飯前でしたわ。一人で浪打際の静な處を、ぶらついて居ますとね、向うの岬の洲の上に、黒く一團、人集りがして居たの。．．．．．傍へ行つて見ると巡査が交つて居て、――私、それがや行くのでは無かつたんだけれど、――朝日は射して居るし、波は青し、砂は美しいし、海の中から観音様の御像でもおあがんなすつたのぢやなからうか知ら、そんな心持がしたもんですから。――

最う筵を掛けてありました。．．．．．身體は何う成つて居るんでせう。紅い切が、血の染んだやうに幽に絡つて、可哀相に、水々とした白い足が、揃つて長く筵の下から出て居たの。房々とした髪がね、まるで櫛の齒を入れたやうに、すんなりと浪の目の立つた砂に着いて。

はツと思つた。けれど、あの、見ないうちなら知らぬ事、一度目に掛けて、急に、顔を背けたり、遠くへ退いては、然も／＼汚らはしがるか、蔑むか、忌はしがりでもするやうで、．．．．．あはれな人

に悪いでせう。

遁げた、除けた、と人の目に着かないやうにして
歸らうと、心ぢや、佛様を念じて居ました。

あれ、それが悪いから私は自分ぢや、わな／＼震
へるのをさへ我慢して、密と立って居たんだのに、
酷いわね、然も／＼汚らしく唾を吐散しながら見
物して居る、少づくりのお婆さんが一人居る。

大年増の學者でね、土地で評判なものです。・

・ ・ ・ 二の乾ものに牛乳を掛けたやうなお化粧をし
て、しゃくれツ面の頰が出て、出額でねえ。あるみ
縁のめがねを掛けて、・ ・ ・ でも鼻だけ隆い
のよ、思召の通。ー どうして田舎ものは、あんな
生際なんでせう、好かんぢやない、つるりと面な
りに輪取つて、眞直に成つて、其處へばかり、膏が
る、磨くんでせうよ。・ ・ ・ 鼻の頭と、其の額が
赤ツ茶けて。因果とね、近視眼らしいから、仰向い
て、鼻で人を見て、うむと云つて一寸其の額で睨ん
ではものを言ふの。・ ・ ・ そんな業を造るくら

ゐなら、何も學者になんか成らずと可い。――其處にあつた死骸のやうに美しく死ねもしやうのに――薄ツペらな服装を仰山らしく、肩裾を膨らまして、銀鎖をぶら下げて居るんだつけ。

其の言ぐさが口惜かつたの。

――無教育だの、墮落だの、工女が何か、――
（あゝ、貧民ですね、うむ、うむ、然うでせう、
瓦斯絲、はぎ／＼、唐縮緬の服装で知れます、はあ、
うむ。）――てツちや額で睨んで、鼻の上にも
がねを躍らして。――お聞きなさい。

――（痴情の果、然うでせうツて、旅役者に、迷つて棄てられた、――自業自得、だが、歎ずべきですね、憐むべきですね、寧ろ呪ふべきですかね、其の愚や及ぶべからずです。――うむ、ばら錢ばかり、何にも持たない、然うでせう、此でも小遣がありや死なゝいかも知れませんが、色の戀のと云つても要するに生活問題ですよ。うむ、然うですとも。――面は？。――打棄られたくらゐぢ

や……しかし悪くないんですって？ 貴方は、
それだから。）——と其處に立會ひのお爺さん
の醫師の背を打つよ。

——（何にしる、教育は大切です。少くともだ
わ、私たちが經營する一列の、なにがしと言ふ學校
の、それこそ門を潜つたら、小使だつて、こんな眞
似はしやしない。詰りです、低能なんですよ。馬鹿
ですとも、其が證據には、遺書を御覽なさい——
乳の下へ赤い紐で結へたつて、あら可厭な、妊娠
してるのね……。益々低能、寧ろ白痴だわよ。
字を御覽なさいよ。塵がみに消炭がこぼれてる形ぢ
やありませんか。）——又唾を吐いて、——
（兎に角可い材料を得ました。……。）

然う云つて、ずらりと、居た人を漁師やなんかニ
して、——（鑑むべきですね、女子教育は大事
です。……。はい、可い材料を得ました。・
……。朝起は三もんの得ですね。）

——死んだ娘さんの心持はどんなでせう。——

夫人ふじんは、其處そこに、天井てんじやうに、其の娘むすめを見みるやうな、
 恍惚うつとりと・・・然さも氣きの緊しまつた端正たしい顔かほ。・・
 彼奴きやつは割膝わりひざに成なつた。

「一度だつて、口も利いた事はないけれども、顔を見たばかりで澤山。もう氣障つたらない。私には、日本中の憎らしさを一人で背負つてる、其の學問年増が、唾を吐き／＼然う云ふのを聞いて、我慢が出来ない。口惜しくつて、癩に障つて。」

ですからね、陰ながら其の娘さんの死骸を何う庇ふよりか私が死骸に成るんです。——そして、瓦斯絲はぎ／＼唐縮緬でない、貧民でない、工女でない、私の死んだ姿を見せて遣るの。嘸、無教育だといふだらうから、それで、私、手習を、手がよくないんですからね、女中に内證で、お消しをしい／＼、手本に縋つて寝ないで一生懸命なんです。でも些と出来て来ました。自分だけに、これで可いと思つたら、綺麗に、すら／＼と書いて、」

夫人は細り胸を抱く。

彼奴は引込まれて、肩をぶる／＼、

「しつかり其を膚身につけて、岬の巖に腰を掛けて、すつと波へ沈むんです。」

氣が沈んで、影の添ふ、姿が浮出て、而して疊が深く成つて沈んだ。

「そして、あの娘さんと同じ所へ死體を置きたい。其のくらゐな我まゝは、死んだあとでも佛様が聞届けて下さるでせう。見たが可い、學問年増。――娘さんは浮んでくれるでせうねえ。」

「浮びます。」

夫人の言はまだ途絶えず、敢て問れたのでもなかつたのに、彼奴は掌を握つて、堅く成つて言つた。

「浮ばねえで、奥さん。思召を伺つただけで私も浮んだ。えゝ、もう何にも仰有らねえで。私のやうなものが泣いちや濟まねえ。折角大事な思召を、此の空涙で嘘にするやうなもんだ。」
と云ひながら、ぼろ／＼と涙を落す。

「奥さん、私あ（法螺の貝） と言はれら。山ぬけをして野を荒らすんだつて。へい、けちな悪黨なんので、悪黨はけちだけれど、人を殺すくれえ、殺すより尚だ酷いや、いま、お前さんを引摺まうとした事なんざ、空腹へ茶めしなんだ。

此の間もね、地潜りで夜中歩いて、・・・・・娑婆に飽倦ながら、死場所に迷つてる爺に逢つてね、宵から何うしても死ねゝえと言ふから、干鰈の罌を教へて、藁に海鼠で、だらりと首を縊つて、ぷら下る奴を鼻突合せて見届けた豪傑なんだ。あゝ可い功德をした、此の功德で、俺もまだ娑婆があらう。爺さんは俺の身代りに、しぼり首に成つてくれた、と一人で嬉しがつたくれえな大和尚なんですが、今その其のお優しい、お情を伺つたら、私あ、私あ、奥さん、」

と歎歎して、聲もしどろに、

「お前さんのお姿の、其處に在らつしやる、此處で、此のまゝ、消えてなくなりたく成つた、ぐツた

りと往生わうじやうがしたく成なりました。死しんだ面つらを、一ひと目め、奥おくさんに見みて頂いたきや成じ佛ぶつする。今いますぐ舌したでも嚙か切きりてえが、可か愛はいい娘むすめなら知しらねえこと、こんな外げ道だうぢやはじめらねえ。はじまりませんや！．．．．．あゝ、不い可けえ、口くちを利きくうちに涙なみだか出でやがる．．．．．．．．．こんな涙なみだにや足あしが生はえて、そこらを蝸け蜒ちんに成なつて這はふと悪わるい．．．．．鼻は紙がみにでも撮つまれてえが、それも榮え耀えうだ。己うぬが身みで、未み練れんらしく、お暇いとまを申まをします。飛とんだ、お騒さわがせをして濟すみません。よく、お前まへさん、こんなものゝ手てが掛かつた時とき、其そ處こから、緑あを錆さびが出でずに居あておくんなすつた．．．．．退といて下くださいまし、そら動うごき出だしやすぜ、へい、何どうも。へい、御ご免めんねえ。」

と言いひつゝ、じり／＼と窓まど下したへ行あ膝ざつて出でて、夫ふ人に身み近ぢかく成なつたので、又またしりごみした。

「勿も體たいねえが、眞ま人にん間げんだつた時ときの阿お母つかあ、死しんだ姉あねが、女をんなの佛ほとけ様のやうに思おもはれます。奥おくさん、一ひと思おもひに、こゝから飛とび出だして消きえてなくなりまますまで、お前まへさん、後ご生しやうだ、些ちつとの間あひだ、雲くもに隠かくれねえで、拜をがま

れて居て頂きてえ。一生に一度の願えだ。いや、串
戯ぢやありません。お金子なんて、……否、
また私に下さると後で御迷惑に成る事があるんだ。
不可え。……不可えと云へば然うだ。寐息で
大丈夫だとは分つてますが、女中衆にね、何うぞ何
にもおつしやらねえで——此方人等が行きがけ
の極つた言種ぢやありませんが、誰にも言つちや成
りませんぜ。お別れに、もう、一目。其の遺書を。」

「まづいんですよ。」

と仇氣ないまで、巻紙を、伊達巻摺れに、さらり
と引くの、窓に立つて熟々視た。

頭巾が、松に潜ると一所に、夫人は立つて、銀貨
入を落した。

「拾つて頂戴。」

一文字に影を引いて、やゝ霧の立つ浪打際へ、鯨
の背の如く、隠れるのを見て、月影を胸に抱いてイ
みつゝ、櫻貝の夫人は空が呼吸するやうな浪を視た。

「あゝ、私たちのすることを、海は何と思ふだらう。」

窓帷を、はらりと引く。

其の曉方に、町も村も摺半鐘の音に驚かされた。

森にも、屋根、海、山、岬を見通しても、一縷の煙の影もない。

ぞろ／＼と出會ひ、立會ひ、唯一ヶ所其を鳴らす村端れの踏切を越した所、山の半腹に立つた火見梯子へ、のんのと駈着けて、田舎は暢氣な、口々に、

「火事は何處だ？」

「汝等の足許だ。」

と梯子の天頂で、三角頭巾の、烏のやうな黒いものが喚いた。

「ひやッ。」

飛上つた群集の足許に、ごろんと轉がしたのは、めがねを掛けた、年増の死骸、紀州ネルの腰の周圍、

就中なかんづく薄汚うすぎたい、どろ／＼衣服ぎものを　　―　　後あとで知しれた
が、―　　學問がくもんを年増としまを裸體らたいにして、わざ／＼着換きが
へさせたものだとことの事ことである。

奴やつは、呵々から／＼と虚空こくうで笑わらつて、林はやしが揺ゆれる如ごとく手足てあし
を振ふつて一同どうが立騒たちさわぐ上うへを、澄すまして跨またぐやうに、
梯子はしこから山懷やまのこへ。．．．．浦うらや、白浪しらなみ、朝嵐あさあらしに尾お
花なが戦そまいだ。

【完】